

ムハンマド・イブン・スライマーン・ジャズーリーの「正統」思想 ——神学著作の記述を手掛かりに——

棚橋 由賀里*

The Theological Thought of Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī

TANAHASHI Yukari

This paper attempts to show the high possibility that Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī, a Moroccan Sufi who flourished in the 15th century, had an “orthodox” Islam faith. Though he wrote a lot of works on Sufism and prayer, his works on theology have long been neglected. Al-Jazūlī has been regarded as a heterodox and fanatic agitator. I compared the descriptions in his theological works with that of *Umm al-Barāhīn*, a famous Ash‘arite work by Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Yūsuf al-Sanūsī, a prominent contemporary theologian, to argue that al-Jazūlī was temperate in theology.

はじめに

本稿の目的は、15世紀モロッコで活躍したスーフィーであるムハンマド・イブン・スライマーン・ジャズーリー (Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī, d.869/1465) に関して、神学著作の分析を通じて、彼のスンナ派の多数派に属する神学者としての側面に光を当てることである。従来、ジャズーリーの著作は顧みられることなく、彼の人物像に関しては過激なジハードの扇動者という側面ばかりが強調されてきた。本稿では、ジャズーリーの著作における神の属性に関する記述を、彼とほぼ同時代・同地域に活躍したアシュアリー学派の著名な神学者であるムハンマド・イブン・ユースフ・サヌーシー (Muḥammad b. Yūsuf al-Sanūsī, d. 895/1490) の著作の記述と比較することで、ジャズーリーの神学思想の位置づけを明らかにする。

1. ジャズーリー研究と神学著作研究の意義

1-1. ジャズーリーについて

彼の生涯等に関しては以前すでに指摘した¹⁾ ため、本稿ではそこで触れていない事柄を中心に簡潔に情報を提示する。

ジャズーリーはアブー・ハサン・シャーズィリー (Abū al-Ḥasan al-Shādhilī, d. 656/1258) のスィルスィラに連なるスーフィーからスーフィズムを学んだ。マリーン朝 (1269-1465) 王家の内紛とポルトガルの侵攻でモロッコ社会が不安定化していた当時、彼は対ポルトガル・ジハードを指導するとともに、キリスト教勢力の侵攻によるモロッコ社会の危機の原因がムスリムの信仰の墮落にあるとしてイスラーム改革を訴え、民衆から広い支持を集めた人物とされている²⁾。彼を名祖とする

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 棚橋由賀里「15-16世紀におけるジャズーリー教団研究に関する先行研究レビュー」『イスラーム世界研究』, 京都大学イスラーム地域研究センター, 第12巻, 2019, pp. 201-221.

2) Vincent J. Cornell, *Realm of the Saint: Power and Authority in Moroccan Sufism*, Austin: University of Texas Press, 1998, pp. 168-191. ただし、コーネルも指摘している通り、現在流布している彼の伝記が書かれたのは死後2世紀を経た17世紀のことであり、後世の潤色を多分に含むと考えられている。

タリーカであるジャズーリー教団は、16世紀にはサアド朝によるワッタース朝(1472–1554)撃破及びモロッコ統一に助力することとなった³⁾。さらに同教団は、地方での民衆に対するイスラーム教育活動も積極的に行なっていた⁴⁾。ジャズーリー教団自体は17–18世紀に消滅したものの、政治・権力志向の性質を持ち、大衆への働きかけを行なった点において、モロッコのスーフィー教団像を大きく転換させたと言える。さらに、現代のモロッコで優勢なダルカーウィー教団にも教義・儀礼の面で影響を与えている。このように、ジャズーリーはモロッコのイスラーム思想と歴史に重要な影響を及ぼしたスーフィーである。

彼の著作としては、預言者ムハンマドを讃える祈祷書『善行の手引き』(*Dalā'il al-khayrāt*)が最も有名であり、モロッコに留まらずイスラーム世界全体で現在も広く読まれている。しかし、ジャズーリーはその他大小の祈祷書のほかにもスーフィズムや神学に関して様々な著作を残している。以下に二次資料と現地調査に基づいて作成したリストを示す。ジャンルの分類は筆者によるものである。

祈祷書

- ・ *Aḥzān wa awrād* (モロッコ王国国立図書館 Bibliothèque Nationale du Royaume du Maroc, Rabat, 以下 BNRM, 所蔵番号 K1572, 筆者未見)
- ・ *Awrād al-Jazūlī* (アブドゥルアズィーズ・サウジアラビア国王図書館 La Fondation du Roi Abdul-Aziz Al Saoud, Casablanca, 所蔵番号 Manus 565/1)
- ・ *Dalā'il al-khayrāt wa shawāriq al-anwār fī dhikr al-ṣalāt 'alā al-nabī al-mukhtār* (al-Dār al-Bayḍā': Maṭba'a al-Najāh al-Jadīdah, 1998 他刊本多数)
- ・ *Hizb al-falāḥ* (BNRM, ms. D1060)
- ・ *Hizb al-kabīr* (モロッコ王立図書館 Bibliothèque Hasaniya, Rabat, 以下 BH, 所蔵番号 ms. 467, 筆者未見、'Abd al-Mughīth ibn Sīdī Muḥammad al-Mustaḥfā Baṣīr, *Al-ta'rīf al-shumūlī bi-l-imām al-Jazūlī*, Rabat: Dār Abī Raqrāq, 2002, pp. 71–93 に全文所収)
- ・ *Risāla fī al-ṣalāt 'alā al-nabī ṣallā Allāh 'alaihi wa sallama* (BH, ms. 614, 筆者未見)

神学書

- ・ *Ajwiba fī al-dīn wa al-dunyā* (BNRM, Q731, 筆者未見、また Ḥassan Jallāb, *Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī*, Marrakesh: Maṭba'a wa al-warāqa al-waṭaniya, 1999, pp. 83–88 に全文所収)
- ・ *'Aqīda fī al-tawḥīd* (BNRM, K989, fols. 38r–39v)
- ・ *'Aqīda al-walī al-ṣāliḥ Sīdī Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī* (BH, ms. 7245, また Jallāb, *Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī*, Marrakesh: Maṭba'a wa al-warāqa al-waṭaniya, 1999, pp. 55–74 に全文所収)
- ・ *Mukhtaṣar ummahāt al-wathā'iq* (BNRM, Q871, 筆者未見)
- ・ *Al-Nuṣṣa al-tāmm li-man qāla rabbī Allāh thumma istaqāma* (筆者未見、散逸し完全版現存せず⁵⁾)

3) *Ibid.*, pp. 230–271.

4) *Ibid.*, pp. 266–269.

5) Cornell の *Realm* によれば、*Al-Nuṣṣa* は Ibn al-Muwaqqit の *Al-Sa'āda al-abadīya* (筆者未見) に一部が収録されている。

- ・ *Ta'liḥ fī al-tawḥīd* (BQ ms. 723/7)
- ・ *Risāla al-sa'y fī al-rujū' ilā allāh wa-faḍl dhikr lā ilāh illā Allāh* (BNRM, D2797, 筆者未見)
- ・ *Risāla fī al-tawḥīd* (ペン・ユーセフ図書館 Bibliothèque Ben Yūsuf, 以下 BY, 所蔵番号 ms. 587, Jallāb, *Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī*, pp. 79–82 に全文所収)

スーフィズムの理論書

- ・ *Khiṣāl al-murīdīn* (BY, ms. 161)
- ・ *Kitāb fī al-zuhd* (BNRM, K989)
- ・ *al-Zuhd* (BY ms. 587/3)
- ・ *Risāla fī al-taṣawwuf* (BNRM, D1960, 筆者未見)
- ・ *Risāla fī al-taṣawwuf ḥawl al-quṭb* (BH, ms. 12262, 筆者未見)

文学書

- ・ *Sharḥ 'alā qaṣīda fī al-malḥūn li-Mūsā ibn 'Alī* (BNRM, D2589, 筆者未見)

これまで『善行の手引き』以外の作品は先行研究でほとんど参照されず、神学書の著者としてのジャズーリーの側面は無視されてきたと言ってよい。次項では、ジャズーリー関連研究及び15–16世紀モロッコのスーフィズム研究の問題点を示す。

1-2. 先行研究批判

ジャズーリー関連研究及び15–16世紀モロッコのスーフィズム研究の問題点は、フランス保護領期・植民地期の研究が乗り越えられていないことである。その大きな特徴として、①ウラマー対スーフィーの二項対立構造、②誤ったスーフィー認識、が挙げられる。

①に関しては、フランスの歴史研究者クー (Auguste Cour) により、15–16世紀モロッコの思想・政治研究においてウラマー対スーフィーの二項対立構造が提示された⁶⁾。この構造には、カーディリー系教団対シャズィリー系教団、知識人対非知識人、体制(マリーン朝・ワッタース朝)対反体制(サアド家、後のサアド朝)といった対立関係も結びつけられた⁷⁾。ここではもちろんジャズーリーが後者に属する。

②に関しては、同じくフランスの考古学者・歴史研究者のテラス (Henri Terrasse) によるモロッコの通史 *Histoire du Maroc* が典型的な研究である。彼は、スーフィズムがウラマーの間にも浸透していたことは認める一方で、スーフィーたちによるジハード等の政治的運動が起きた15–16世紀モロッコ社会を「マラブーティズムによる危機 *la crise maraboutique*」⁸⁾ という語で否定的に説明した。テラスの論をまとめると以下ようになる。中央の統治能力が弱かったマリーン朝末期からワッタース朝期にかけて、各地で民衆の支持を得たスーフィー・聖者 *marabouts* が勢力を伸ばし、ジハードの命令権や名声等の権益を享受するようになった。これに並行して、ジャズーリーによっ

る。その他の複数の写本集にも *Al-Nuṣṣ* の一部が収録されていると *Realm* に記されているが、現時点でそれ以上の詳細は不明である。

6) Auguste Cour, *L'Établissement des dynasties des chérifs au Maroc: leur rivalité avec les Turcs de la régence d'Alger*, Paris: Ernest Leroux, 1904.

7) *Ibid.*, pp. 53–58.

8) スーフィー・聖者の利益追求を目的とした動きによる国家・社会の危機を意味するこの語は、先行研究において17世紀のサアド朝崩壊を説明する際にも用いられてきた。

でシャーズィリー教団の教義がモロッコ特有のものへと変化するとともに、シャリーフ崇敬がスーフィー・聖者崇敬と結びついた。ゆるやかに連帯していたものの、特定の一人の指導者ではなく複数のスーフィー・聖者に指揮されたジハードは、モロッコの排外主義 *xénophobie* や無政府主義という根強い伝統 *une redoutable tradition d'anarchie* に帰着し、動揺を引き起こした⁹⁾。すなわちスーフィー・聖者の利益追求を目的とした扇動によって、モロッコ社会が混乱したというものである。キリスト教勢力による侵攻がモロッコ社会に及ぼした影響を過小評価し¹⁰⁾、モロッコ社会の混乱と無政府状態の原因をスーフィー・聖者崇敬に求めているもので、明らかに植民地統治者としてのバイアスがかかっている。

これらの見解は、20 世紀後半以降批判されているが、その後の研究の多くは部分的にせよ上記の見解を追認している。例えばカブリー (Mohamed Kably) は、モロッコ社会の混乱の原因をスーフィー・聖者のみに限定することは否定しているものの、「知的な」モロッコ北部のスーフィズムと南部の「不道德な」スーフィズムという対立構造を提示した¹¹⁾。またガルシア・アレナル (García-Arenal) は、王朝と教団の結びついた対立関係を否定する一方で、やはり北部の都市のウラマーと南部の農村・山岳地帯の熱狂的なスーフィーという図式は温存している¹²⁾。対立構造そのものを批判し、なおかつジャズーリー教団を扱ったものがコーネル (Vincent J. Cornell) の研究¹³⁾であるが、主な焦点は教団の教義を完成させた第3代指導者であるアブドゥッラー・ガズワーニー ('Abd Allāh al-Ghazwānī, d. 1528–9) の思想に当てられている上、やはりジャズーリー自身の著作からその思想を読み取る試みはなされていない。

1-3. 神学著作を検討する意味

スーフィズムに関する著作の研究は霊魂論、存在論、修行論といった理論書に絞って行われる傾向にあるが、神と合一するというスーフィズムの最終目的に鑑みれば、合一対象である神をスーフィーがどのように理解しているかをまず明らかにしておく必要がある。また、著作を残すスーフィーは神学・法学など他のイスラーム学も修めた知識人であることが多いにもかかわらず、スーフィーによるスーフィズム以外の著作は研究されてこなかった。神学著作を読み解くことで、スーフィーの思想をより深く理解するとともに、スーフィーによる神学の受容・解釈という側面を明らかにすることもできる可能性がある。

1-4. アシュアリー学派における神の属性

マグリブで優勢であるアシュアリー学派について、本項ではその属性論を概説する。アシュアリー学派を扱った本邦の研究では、同学派における神の属性は以下の7つであるとされている場合が多い¹⁴⁾。

・力 *al-qudra* ……神が全能であること

9) Henri Terrasse, *Histoire du Maroc*, 2 vols, Casablanca: Atlantide, 1949, pp. 143–148.

10) *Ibid.*, pp. 146–147. キリスト教勢力、特にポルトガルの進出がモロッコ社会に及ぼした影響に関しては、Vincent J. Cornell, “Socioeconomic Dimensions of Reconquista and Jihad in Morocco: Portuguese Dukkala and the Sa'did Sus, 1450–1557,” *International Journal of Middle East Studies* 22(4) (1990), pp. 379–418. を参照。

11) Mohamed Kably, *Société, pouvoir et religion au Maroc à la fin du moyen-âge*, Paris: Maisonneuve & Larose, 1986, p. 319.

12) Mercedes García-Arenal, “Sainteté et pouvoir dynastique au Maroc: la résistance de Fès aux Sa'diens,” *Annales ESC* 45.4: 1019–42.

13) Cornell, *Realm*.

14) 塩尻和子「属性」, 大塚明夫編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002.

- ・意志 al-irāda ……神が行為を意思すること
- ・知識 al-‘ilm ……神が全知であること
- ・永生 al-ḥayāt ……神が生きていること
- ・聞くこと al-sam‘ ……神が全てを聞いていること
- ・見ること al-baṣar ……神が全てを見ていること
- ・言葉 al-kalām ……神が言葉で語ること

ただしこの説は、アシュアリー学派において常に合意を得られてきた見解ではない¹⁵⁾。学祖アシュアリーは神の属性に関する記述を残しておらず、これを論じたのは後世の弟子たちである。ギマレ(Daniel Gimaret)によれば、イブン・フーラク、クシャイリー、スプキー、バグダーディーは上記の7属性に加えて存続 baqā’ を神の重要な属性に数えている。バーキッターニーは著書 *Kitāb tamhīd al-awā’il wa-talkhīṣ al-dalā’il* において存続を加えた8属性を重要な属性としている一方で、別の著作では存続を排除している。シャフラスターニーは、存続を神の主要属性とするか否かについては意見の相違があることを伝えている¹⁶⁾。

2. 『神の唯一性に関する信条』(‘Aqīda fī al-tawḥīd) 和訳抜粋

本節では、1-1 のリストで挙げた『神の唯一性に関する信条』から二つの部分を訳し、引用する。引用文中の()内は原語の転写を示す。

抜粋部分 A

高潔なワリーである長ムハンマド・ブン・スライマーン・ジャズーリー——神が彼を嘉し、また彼を通じて我々に恩恵をもたらしますように——による神の単一性に関する信条。アーミーン。アッラー——彼が力強く偉大でありますように——の真智(ma‘rifa)に関する節。その真智は4つの部分、すなわち本質的なもの(dhātīya)と概念的なもの(ma‘nawīya)¹⁷⁾と行為に関わるもの(fī‘liya)と否定的なもの(salbīya)から成る。本質的な属性に関しては、それは「唯一性(al-waḥdānīya)」と、「存在(al-wujūd)¹⁸⁾」と、「無始(al-qidam)」と、「無窮(al-baqā’)」と、「生成とは相容れないこと(al-mukhālafa li-l-ḥawādith)」と、そして「ご自身に依拠されること(al-qiyām bi-l-naḥs)」に関する真智である¹⁹⁾。(後略)

抜粋部分 B

また霊的なもの(の属性の真智)に関しては、それは「知識(al-‘ilm)」と、「御力(al-quḍra)」と、「御意志(al-irāda)」と、「永生(al-ḥayāt)」と、「言葉(al-kalām)」と、「聞くこと(al-sam‘)」と、「見ること(al-baṣar)」と、嗅ぐことなしに嗅がれるもの(al-mashmūmāt min ḡayr shamm)、味わうことなしに味わわれるもの(al-madhūqa min ḡayr dhawq)²⁰⁾、触ることなしに触られる

15) 日本語の文献で7属性説のみが取り上げられているのは、ガザーリーの体系立った神学書であり、本邦において研究の蓄積が深い『中庸の神学』において採用されていたためではないかと筆者は考えている。

16) Daniel Gimaret, *La doctrine d'al-Ash'arī*, Paris: Les Éditions du Cerf, 1990.

17) 写本の表記に従う。

18) 原文では al-wujūh となっているが、al-wujūd の誤記であると考えられる。

19) ‘Aqīda fī al-tawḥīd, f. 38r.

20) 写本の表記に従う。単数形。

もの (al-malmūsa min ghayr lams)²¹⁾ すべて、至高なる神の本質に存するこのような概念的なものへの「理解 (al-idrāk)」に関する真智である²²⁾。

以上から、ジャズリーーは神の属性を本質的なもの、概念的なもの、行為に関わるもの、否定的なもの、4種類に分類している²³⁾。そのうち概念的なものとして挙げられた8つの属性のうち7つが、14で挙げたアシュアリー学派の主要属性に一致する。ただし8つ目の属性は「存続」ではなく「理解」である。

3. 『証明の母』 (Umm al-barāhīn) の和訳抜粋と比較

本節で引用するのは、アシュアリー学派の著名な学者ムハンマド・イブン・ユースフ・サヌースィーの『証明の母』である。

サヌースィーは15世紀のトレムセン (現在のアルジェリア北西部) で活躍したアシュアリー学派の神学者である。彼はイスラーム諸学を学んだのち、晩年病に倒れるまでモスクで教授し、『証明の母』をはじめとする神学書を複数著したほか、論理学、ハディース、代数学など様々な分野に関して著作や注釈を残した。『証明の母』を含む彼の信条書はサアド朝下の神学の教科書として最もよく用いられ²⁴⁾、彼の教えは現在も北アフリカ、西アフリカで広く受け入れられている²⁵⁾。すなわちサヌースィーは、生前からその学識を評価され、死後も現在に至るまで著作を参照され続けている人物と言える。マグリブにおけるアシュアリー学派の研究は乏しく、現状、彼の他にはこの時期で取り上げうる代表的な神学者は見られない²⁶⁾。そのため、本稿では15世紀のマグリブを代表するアシュアリー学派の神学者として、その著作を取り上げ、ジャズリーーの著作と比較する。訳出に当たっては、松山洋平『イスラーム神学古典選集』作品社、2019、pp. 73–84を参照しながらも、あくまで筆者の責任において行った。

抜粋 A'

我々の偉大にして力強き庇護者について、必然であるものの中には以下の20の諸属性がある。

「存在 (al-wujūd)」

「無始性 (al-qidam)」

「無窮性 (al-baqāʾ)」

「至高なる彼と生起物との相違 (mukhālafatuhu taʾālā li-l-ḥawādith)」

「至高なる彼が御自身に依拠されること (qiyāmuhu taʾālā bi-nafsihi)」すなわち、彼が場所も特定因も必要とされていないということである。

21) 写本の表記に従う。単数形。

22) 'Aqida fi al-tawhīd, f. 38r.

23) ただしジャズリーーは、行為に関わるものと否定的なものに関して、その内容を明らかにしていない。

24) Derfina Serrano Ruano, "Later Ash'arism in the Islamic West," *The Oxford Handbook of Islamic Theology*, Oxford: Oxford University Press, 2018, pp. 515–533.

25) H. Bencheneb, "al-Sanūsī," *EF*, vol. 9, Leiden: E. J. Brill, 1997.

26) Gimaret, *La doctrine d'al-Ash'arī* といったアシュアリー学派の概説書で解説されるのは、アシュアリーからガザリーーに至るまでの、主にマシュリクで活躍した人々である。アンダルスを含むイスラーム世界西方の神学を扱った研究には D. Urvoy のものがあるが、いずれもアヴェロエスとして知られるイブン・ルシュド (Ibn Rushd, 520/1126–595/1198) に関するものである。Ruano, "Later Ash'arism in the Islamic West" はイブン・ルシュド以外にも目を向けて、歴史叙述に焦点を当てたものである。しかしムラービト朝における神学論争を詳説したのち、その最終的な調停者としてサヌースィーを取り上げており、その間3世紀のマグリブ・アンダルスにおけるアシュアリー学派の動向には触れていない。

「唯一性 (al-waḥdānīya)」すなわち、彼の本質においても、彼の諸属性においても、彼の諸行為においても、彼に第二の者がいないということである。

これらが6つの属性である。最初のものが自存的 (nafsiyya) (属性)、すなわち存在であり、あとの5つが否定的 (salbiyya) (属性) である。(後略)

抜粋 B'

また至高なる彼には、概念属性 (ṣifāt al-ma'ānī)²⁷⁾ と呼ばれる7つの属性が必然である。

あらゆる可能存在に関する「御力 (al-quḍra)」と「御意志 (al-irāda)」

あらゆる必然存在、可能存在、不可能存在に関する「知識 (al-'ilm)」

事物に関連しない「永生 (al-ḥayāt)」

あらゆる存在物に関する「聞くこと (al-sam')」と「見ること (al-baṣar)」

決して文字や音声でなく、知識の対象となるものを対象とする「言葉 (al-kalām)」。

さらに、至高なる彼には、概念的属性 (ṣifāt al-ma'nāwīya)^{28) 29)} と名付けられる7つの属性が必然である。

すなわち、至高なる彼が、「能う者 (al-qādir)」であり「意図する者 (al-murīd)」であり「知る者 (al-'ālim)」であり「生きる者 (al-ḥayy)」であり「聞く者 (al-samī')」であり「見る者 (al-baṣīr)」であり「話す者 (al-mutakallim)」であることである³⁰⁾。

前節の A と A' の比較から、『神の唯一性に関する信条』における神の本質的属性の内容は、『証明の母』における自存的属性と否定的属性を合わせたものの内容と一致することがわかる³¹⁾。

また B' において、サヌースィーの挙げた概念属性はアシュアリー学派の主要7属性に一致している。これを B と比較すると、ジャズーリーの挙げた「理解 (idrāk)」がサヌースィーと異なっていることがわかる。ただし、『証明の母』の概念属性に関する注釈によれば、アシュアリー学派の神学者の間で、神の属性に味 (al-tu'ūm) や匂い (al-rawāi'h) への理解を意味する「理解 (idrāk)」を数えるか否かという議論が存在するという³²⁾。これは先ほど引用した『神の唯一性に関する信条』の「味わうことなしに味わわれるもの、触ることなしに触られるものすべて、至高なる神の本質に存するこのような概念的なもの (al-ma'ānī) への理解」という記述に一致する。具体的な議論としては、「理解 (idrāk)」が「知識 (al-'ilm)」に包含される属性である説と、「知識 (al-'ilm)」から独立した第8の属性であるという説が存在する³³⁾。サヌースィーは前者の説を、ジャズーリーは後者の説を支持しているということになる。すなわち、ジャズーリーとサヌースィーの相違点は、アシュアリー学派の枠組み内における見解の相違であると言える。したがって、ジャズーリーはアシュアリー学派に属すると考えるのが妥当である。

27) 写本の表記に従う。

28) 写本の表記に従う。

29) 松山は ṣifāt al-ma'ānī を「概念属性」、ṣifāt al-ma'nāwīya を「概念に起因する属性」と訳しているが、本稿では筆者による TT および AT における訳語に合わせた。

30) Muḥammad ibn Yūsuf al-Sanūsī, *Umm al-barāhīn*, Muḥammad Ṣādiq Darwīsh ed., Damascus: Dār al-Bayrūtī, 2009, pp. 41–60.

31) この分類方法の相違がアシュアリー学派においてどの程度重大なものであるかに関しては、さらなる検討を必要とする。

32) Muḥammad Ṣādiq Darwīsh, in Muḥammad ibn Yūsuf al-Sanūsī, *Umm al-barāhīn*, Muḥammad Ṣādiq Darwīsh ed., Damascus: Dār al-Bayrūtī, 2009, pp. 41–60.

33) *Ibid.*

おわりに

本稿の議論を整理する。第1節では、まずジャズーリー研究の重要性を示した。次いで、ジャズーリーの著作を顧みることなく、後世の伝記著作や植民地期の誤ったスーフィー認識に基づいてジャズーリーを過激なジハード指導者としてきた先行研究を批判した。そして神学著作の研究の必要性を主張するとともに、マグリブで主要な神学派であるアシュアリー学派の神の属性に関する見解を概説した。第2節では、ジャズーリーの神学著作『神の唯一性に関する信条』を分析し、第1節で挙げたアシュアリー学派の見解との相違点を示した。第3節では、ジャズーリーとほぼ同時代のマグリブで活躍したアシュアリー学派の神学者であるサヌースィーの著作『証明の母』を分析するとともに、第2節で明らかにしたジャズーリーの見解と比較した。その結果、ジャズーリーとサヌースィーが神の主要な属性として挙げたものの内容は、その大部分が一致し、相違点もアシュアリー学派の枠組みの中で理解できるものであることがわかった。以上のことから、ジャズーリーはアシュアリー学派に属する神学思想の持ち主であると結論づけられる。

これまでの研究においては、過激なジハードの扇動者という側面ばかりが強調されてきた。しかし、本稿の分析を通じて、ジャズーリーにはマグリブにおけるスンナ派の中の多数派の神学派であるアシュアリー学派の神学者という側面もあるということが明らかになった。これは、ジャズーリー自身の神学著作を分析したことで初めて分かったことである。

その一方で、今回分析したのはジャズーリーの著作のごく一部であり、彼の思想と人物像の全容を明らかにするにはさらなる分析を必要とする。彼の著作を質量ともに読み解き、彼がモロッコのスーフィズムに及ぼした影響を詳らかにしていくことが今後の課題となる。